2020.12.6 説教

待降節第 2 主日

「神の道」

イザヤ 40 章 1-11

◆帰還の約束

40:1 慰めよ、わたしの民を慰めよと／あなたたちの神は言われる。

40:2 エルサレムの心に語りかけ／彼女に呼びかけよ／苦役の時は今や満ち、彼女の咎は償われた、と。罪のすべてに倍する報いを／主の御手から受けた、と。

40:3 呼びかける声がある。主のために、荒れ野に道を備え／わたしたちの神のために、荒れ地に広い道を通せ。

40:4 谷はすべて身を起こし、山と丘は身を低くせよ。険しい道は平らに、狭い道は広い谷となれ。

40:5 主の栄光がこうして現れるのを／肉なる者は共に見る。主の口がこう宣言される。

40:6 呼びかけよ、と声は言う。わたしは言う、何と呼びかけたらよいのか、と。肉なる者は皆、草に等しい。永らえても、すべては野の花のようなもの。

40:7 草は枯れ、花はしぼむ。主の風が吹きつけたのだ。この民は草に等しい。

40:8 草は枯れ、花はしぼむが／わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ。

40:9 高い山に登れ／良い知らせをシオンに伝える者よ。力を

振るって声をあげよ／良い知らせをエルサレムに伝える者よ。声をあげよ、恐れるな／ユダの町々に告げよ。見よ、あなたたちの神

40:10 見よ、主なる神。彼は力を帯びて来られ／御腕をもって統治される。見よ、主のかち得られたものは御もとに従い／主の働きの実りは御前を進む。

40:11 主は羊飼いとして群れを養い、御腕をもって集め／小羊をふところに抱き、その母を導いて行かれる。

マルコ◆洗礼者ヨハネ、教えを宣べる

1:1 神の子イエス・キリストの福音の初め。

1:2 預言者イザヤの書にこう書いてある。「見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、／あなたの道を準備させよう。

1:3 荒れ野で叫ぶ者の声がする。『主の道を整え、／その道筋をまっすぐにせよ。』」そのとおり、

1:4 洗礼者ヨハネが荒れ野に現れて、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。

1:5 ユダヤの全地方とエルサレムの住民は皆、ヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた。

1:6 ヨハネはらくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べていた。

1:7 彼はこう宣べ伝えた。「わたしよりも優れた方が、後から来られる。わたしは、かがんでその方の履物のひもを解く値打ちもない。

1:8 わたしは水であなたたちに洗礼を授けたが、その方は聖霊で洗礼をお授けになる。」

ルカ◆洗礼者ヨハネ、教えを宣べる

3:1 皇帝ティベリウスの治世の第十五年、ポンティオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデがガリラヤの領主、その兄弟フィリポがイトラヤとトラコン地方の領主、リサニアがアビレネの領主、

3:2 アンナスとカイアファとが大祭司であったとき、神の言葉が荒れ野でザカリアの子ヨハネに降った。

3:3 そこで、ヨハネはヨルダン川沿いの地方一帯に行って、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。

3:4 これは、預言者イザヤの書に書いてあるとおりである。「荒れ野で叫ぶ者の声がする。『主の道を整え、／その道筋をまっすぐにせよ。

3:5 谷はすべて埋められ、／山と丘はみな低くされる。曲がった道はまっすぐに、／でこぼこの道は平らになり、

3:6 人は皆、神の救いを仰ぎ見る。』」

「私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安とがあなたがたにあるように。」

待降節第 2 週目を迎えました。アドベント・クランツには 2 本目のローソクに火が灯されました。「わたしは世に光である」（ヨハネ 8 章 12 節）と宣言されたイエス様のお言葉通り、光の到来を表します。

本日は、旧約聖書イザヤ書 40 章から、聖書信仰の福音の原点を聴いてまいります。

その初めに、本日の福音書の日課であるマルコ 1 章の御言葉から見てまいります。

マルコ 1 章 1 節、（P.61）

「1:1 神の子イエス・キリストの福音の初め。
1:2 預言者イザヤの書にこう書いてある。「見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、／あなたの道を準備させよう。
1:3 荒れ野で叫ぶ者の声がする。『主の道を整え、／その道筋をまっすぐにせよ。』」

3 節に「主の道を整え」とあります。一般的に「主の道」と聞きますと、「信仰」というものを連想する方もおられます。そのように思う方々は、神と向き合い、神に向かってまっすぐに歩む生活を想像されるのです。

ところが、クリスマスが伝える福音は、御子の誕生、すなわち神の子の訪れであります。そして、御子イエス様による伝道の第

一声は、「神の国は近づいた」でありました。さらに、十字架ののち、復活のキリストの約束は「再び来る」というお言葉でした。

聖書は、神を求める者が神へと向かって行くための手引き書ではありませんし、神へと向かう方法を「信仰」と呼ぶわけでもありません。

イエス様の呼びかけは、例えば、「あなたは人の子を信じるか」（ヨハネ 9 章 35 節）であり、「生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか」（ヨハネ 11 章 26 節）でありました。

マルコと同様、ルカによる福音書でもイザヤ書から同じ言葉が引用されています。

ルカ 3 章 4 節、（P.105）

「これは、預言者イザヤの書に書いてあるとおりである。「荒れ野で叫ぶ者の声がする。『主の道を整え、／その道筋をまっすぐにせよ』と。

ルカは、「主の道を整え、／その道筋をまっすぐにせよ」の内実として、引用の言葉を続けています。

3 章 5 節、

「谷はすべて埋められ、／山と丘はみな低くされる。曲がった道はまっすぐに、／でこぼこの道は平らになり、人は皆、神の救いを仰ぎ見る」と。

つまり、「主の道を整える」とは、「山を削り、谷を埋めて、でこぼこを平らにする平等の世界」のイメージを提供しています。

イザヤという預言者集団が活動したのは紀元前 750 年頃から 550 年頃まで。それからおよそ 700 年、イエス様がお生まれになる頃には、イザヤの伝えた福音も大いに展開され、ルカが伝えるような内容となっていました。

しかしながら、大切なところが見失われつつあります。そこで、本日は「主の道を整える」ことの原点を語ったイザヤの言葉を確かめております。

40 章 1 節、（P.1061）

「慰めよ、わたしの民を慰めよと／あなたたちの神は言われる」とあります。

イザヤ書は、他の書簡とは違い、イスラエルの 200 年間の歴史を書き留めていますから、当然、イザヤという個人一代限りの活動ではありません。少なくとも三世代にわたるイザヤ教団・集団・グループとしての指針の継承、活動の継続がありました。

そして、この 40 章からは、第一世代の神の審判の時が終わり、神による慰めの時が始まったという、第二世代の福音が語り始められる大きな区切りとなっています。

40 章 3 節、

「呼びかける声がある。主のために、荒れ野に道を備え／わたしたちの神のために、荒れ地に広い道を通せ」

この聖句が本日のテーマとなっている言葉です。福音書に引用された「主の道」とは、「主のために」また「神のために」とあるように、神が人間の世に来られる道であると書かれています。神を求める者の「信仰の道」ではないことが分かります。

「主の道」は、クリスチャンが神と向き合うために「身だしなみを整えること」とは、全く違う事柄なのです。

では、「神の道を整える」とは、どういうことでしょうか。また、神が人間の世界に来られたならば、どうなるのでしょうか？

40 章 4 節、

「谷はすべて身を起こし、山と丘は身を低くせよ。険しい道は平らに、狭い道は広い谷となれ」

と書かれています。このような世界が目指されています。

このことが、本日の御言葉で最も大切なところです。

ルカ福音書の言葉を振り返ってみましょう。

3 章 5 節、

「谷はすべて埋められ、／山と丘はみな低くされる。曲がった道はまっすぐに、／でこぼこの道は平らになり、人は皆、神の救いを仰ぎ見る」

となっていました。

イザヤとルカの違いは、「谷」というものの捉え方です。

聖書の言う「谷」とは、世の中で光の当たらない「陰の部分」であり、そこに生きる人々を指しています。

ルカは「谷を埋める」と書いていますが、イザヤは「谷は身を起こす」と語っています。もちろん、イザヤの言葉が原点です。

なぜ、ルカはイザヤの言葉を引用したにもかかわらず、このような違いが生じてしまったのか。それは、新約聖書における、旧約聖書から引用された言葉が、旧約聖書のヘブライ語原典からで

はなく、ギリシャ語に翻訳された「70 人訳聖書」（前 2 世紀-1 世紀）から引用されたためでした。

イザヤの「谷」に対する福音を、ギリシャ語への翻訳者たちが汲み取れなかったということでありましょう。

では、ルカの言う「谷を埋める」ことと、イザヤの言う「谷が身を起こす」こととは、どのように違うのでしょうか。

「谷を埋める」ことは、欠けを埋めること、不足を補うことですから、持っている者が持っていない者に差し出すこと、出来ない者が出来る者に助けられることを意味しています。

このことに対し、「谷が身を起こす」とは何かを考えます。これは、補われることなく、ありのままが受け入れられる世界でありましょう。例えば、子どもが子どもとして受け入れられる、あるいは、病人が、高齢者が、障がいのある者が、外国人が、そのままに受け入れられることでしょう。

聖書で印象的な箇所は、ヨブ記です。

19 章 26 節、（P.800）

「この皮膚が損なわれようとも／この身をもって／わたしは神を仰ぎ見るであろう。このわたしが仰ぎ見る／ほかならぬこの目で見る」

ここには、癒される前のヨブがいます。癒されたから神を見るのではなく、癒されぬその身のままに神を慕う姿が印象的です。

そして、42 章 5 節、（P.833）

「あなたのことを、耳にしてはおりました。しかし今、この目であなたを仰ぎ見ます」
と、ヨブの願いは聞き入れられます。
さらに、この、まだ癒されぬヨブに執り成しを求めることによってのみ、ヨブを追い詰めてきた友人たちは神に赦されるという試練が待っています。
こうして、癒されぬヨブの姿のままにすべてが全うされた後、ようやくヨブは癒されていくのです。

アドベント、それは御子の「到来」です。
ルカによれば、御子は飼い葉桶に生まれます。「飼い葉桶」は「谷」の象徴でもあります。そこに御子が生まれる。光の届かなかった場に光が生まれる。
「谷が身を起こす」とは、谷が谷のままに、そこに御子が来てくださることの約束です。
教会が、誰もがありのままに居れる場となるよう、御子は生まれたもうのです。

「望みの神が、信仰からくるあらゆる喜びと平安とをあなたがたに満たし、聖霊の力によって、あなたがたを望みに溢れさせてくださいます」